認知症高齢者の排泄援助における看護師の困難感－障害者等一般病棟での調査から－

小林真悠子、高橋智美
新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科

【背景・目的】 我が国の 65 歳以上の高齢者人口は 2012 年に過去最高の 3,079 万人となった。内閣府によると 65 歳以上の認知症高齢者数は 2012 年では 462 万人と集計され、65 歳以上の高齢者の約 7 人に 1 人が認知症であることを示している。また、認知症の有病率は 15.0%となっている。このため認知症を有する入院患者が増加してくると考えられる。実際に医療現場の看護師は認知症患者の訴えを理解できない、看護師の説明を理解してもらえない、BPSD とそれに関連した認知症特有の症状への効果的な対応方法が見つからない等の困難感を抱いている。また、認知症患者に限らず排泄援助を受ける高齢者を対象とした研究では、排泄時は施設のルールに従おうと努力する一方で、異性のスタッフによる援助は恥ずかしいなど排泄援助に対して受け入れられない高齢者がいることが明らかになっている。しかし高齢者の多くが世話になりたくないと感じている排泄援助における認知症看護の困難感については明らかにされていない。そこで本研究では、認知症高齢患者の排泄援助においてどのような困難が生じるのかを明らかにする。本研究の実施により、認知症高齢患者の排泄援助の困難を予測した看護に繋げることができる。

【方法】 本研究では、インタビューガイドに基づく半構成的面接を実施し、その内容を質的統合法（KJ 法）で分析した。得られたデータは匿名性の確保に努め、逐語録は整理番号制とし、番号個人が特定されないようにした。本学倫理審査委員会を受審し、承認(18233-190705)を得た。尚、本研究における利益相反はない。

【結果】 対象者はすべて女性で、看護師経験年数はそれぞれ異なる。概要を表 1 に示す。

表 1 対象の概要

ケース	性別	看護師経験年数	役割
A	女性	32 年	主任看護師
B	女性	31 年	なし
C	女性	3 年	なし

分析結果は、逐語録より 130 枚のラベルを作成し、5 段階で 6 枚の最終ラベルとなった。以下に本ストーリーを斜体で最終ラベルのシンボルマークを《　》で示す。また見取り図を図 1 に示す。

排泄援助における《看護師と患者の葛藤》として双方の思いが伝わらない困難感を抱いている反面、《看護師中心のケア》としてオムツ対応による時間と労力の削減をすることで看護師が楽になると考えている。これらを基盤にしながら患者の行動目的を理解した安全確保の構築という《援助の可能性》を見出した。そのため《患者の排泄欲求に応じた援助》として言葉の選定とタッチング・傾聴の活用がなされている。今後も統一したケアを実施するために《認知症の学習の必要性》があり、援助の見直しと連携体制の構築として《チーム連携の必要性》がある。

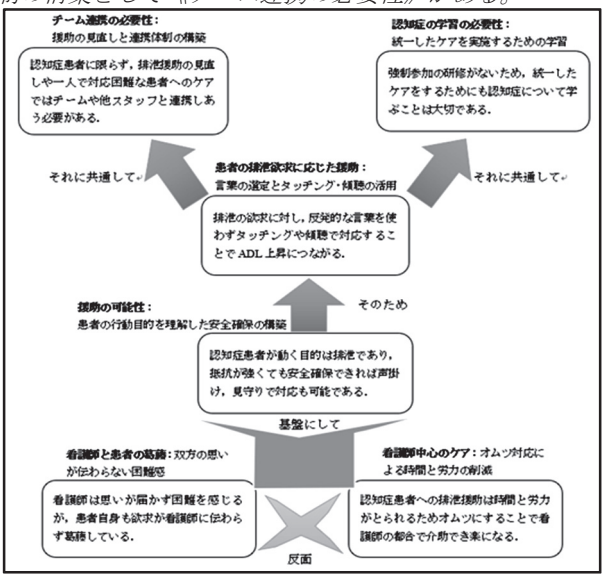

図 1　排泄ケアにおける看護ケアの構造と見取り図

【考察】看護師が認知症患者の排泄援助で抱く困難感は、患者の理解力低下により、ケアの目的や内容が患者に伝わらずケアが困難になることであった。しかし経験年数が長い看護師ほど困難感を抱くのは看護師だけではなく、認知症患者も同様に看護師に自分の欲求や思いが伝わらないという葛藤を抱いていると感じていた。多くの認知症患者の看護を実施してきたことで、感じ取ることができた患者理解であると考える。しかし認知症患者は自分自身に転倒リスクがあるということを理解することができないため、看護師はトイレ誘導よりもオムツ対応が労力軽減になり楽だと感じている側面もあった。これは看護師中心のケアであり、看護の本質である患者中心の看護とはいえない。認知症患者の意思を尊重したケアを実施するためには、環境や他スタッフとの連携による対応が重要となる。

今後さらに認知症患者は増加傾向にあるため認知症について看護師が学習しなければならないと考える。新人研修で認知症について学習するが、その後は個人の意欲によって研修を受講する体制になっている病院が多いと考えられる。統一したケアを提供するためにも、看護師の認知症に対する理解を深める機会を増やすことが今後の課題である。

【結論】看護師が認知症患者の排泄援助で抱く困難感は、患者の理解力低下により、ケアの目的や内容が患者に伝わらずケアが困難になることであった。看護師は患者の欲求に応えなければいけないと感じている反面、オムツ対応にすることで時間と労力軽減になり楽だと感じていた。